

コロナ禍に伴う子どもの『いのち・生活・学び・発達』の危機の現状と 発達支援の課題②

【シンポジスト】

奥田宣子氏（山県市立高富中学校教頭）

大学生（A 大学在学中）

小森淳子氏（岐阜協立大学非常勤講師）

【コーディネーター・司会】

杉山章氏（東海学院大学人間関係学部子ども発達学科准教授）

池田敦子氏（東海学院大学人間関係学部子ども発達学科客員教授）

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、子どもの心身の健康、家庭の経済状況、学習や発達、将来展望に深刻な影響を与え、感染症への不安・恐怖、自粛・我慢を強いられる先行きの見えない生活の中で、孤独・孤立、不安・抑うつ・ストレス、睡眠・食・生活リズムの乱れ、学校に行きづらいつとを感じる子ども、自傷行為、自殺者数の増加など、コロナ禍に伴う子どもの多様な「いのち・生活・学び・発達」の困難が国内外で報告されている。

本シンポジウムでは、コロナ禍における子どもの「いのち・生活・学び・発達②」として、県内に在住する中学校の教師、大学で学ぶ学生、障害者福祉の研究者であり障害のある当事者の方の報告から、様々な場において手探りで行われてきた対応や、コロナ禍における子どもの生活と発達の困難・リスクを明らかにすることで、学校教育・発達支援の意義・役割と展望について論議していく。

奥田宣子氏には「With コロナの中で生き抜く力」の教育実践として、教師の思いや生徒の思い、生活の変化、学びへの気持ち、友達との関り、家庭での関り、地域社会との関りなどについて報告をいただき、教育実践を通してコロナ禍における学校の役割（生活・発達）と今後の展望・希望について論議していく。

学生 A 氏には、大学生当事者としての立場から、大学生活のなかでコロナ禍をどのように捉えてきたか、大学での学び、友達との関り、バイトなどの生活の変化を通して、感じたこと成長したことなどについて報告をいただき、大学教育、大学生活の在り方と今後の展望、後輩たちに伝えておきたいことなどについて論議する。

小森淳子氏には、障害者福祉の研究者としてまた障害のある方の当事者として、障害のある子どもや保護者の気持ちを代弁していただく。コロナ禍での生活や学びの困難、今までとは異なる生活様式などの問題について報告をいただき、コロナ禍での子どもの生活における学校の役割や福祉の在り方、今後の展望など論議をまとめていただく。

杉山章（コーディネーター・司会）

特別支援学校や国立大学附属小学校特別支援学級で勤務（14年間）したのち、大学院にて知的障害者を対象としたオープンカレッジの実践に取り組んだ。その後、市教育委員会で特別支援教育指導員として、教育委員会と発達支援センターで勤務しながら、市内の公私立幼稚園や保育所を、幼保小連携推進・幼児期の特別支援教育の観点から訪問してきた。2012年より東海学院大学において、幼稚園教諭や保育士、特別支援学校教員の養成に携わっている。

池田敦子（コーディネーター・司会）

2014年3月まで特別支援学校に32年間勤務したのち、国立大学の学生支援総合センター学生特別支援室において、学生支援コーディネーターとして障害のある学生や発達障害等発達困難を有する学生の支援と障害学生支援体制システム作りにも携わった。2017年4月より、東海学院大学人間関係学部子ども発達学科において、特別支援学校教員養成教育の傍ら障害学生支援システムを構築し支援を行っている。